

English Garden 第61話

"We all want to help one another. Human beings are like that."

Charles Chaplin

「私たちはみなお互いに助け合いたいと思っています。人間とはそういうものなのです」 チャールズ・チャップリン

チャールズ・チャップリン自作自演・監督による初の全トーキー映画 "The Great Dictator" ("独裁者", 1940年) から、民主主義を礼賛する結びの演説の一部です。

この映画は、まず次のタイトルで始まります。

「独裁者のヒンケルと、ユダヤ人の床屋が、よく似ているとしても、それは、まったく偶然にすぎない。これは二つの世界大戦の谷間、狂気が支配していた時代の物語である。自由は地に墜ち、人間性はないがしろにされていた」(進藤光太郎訳)

「独裁者」が公開される1年半前の1939年4月、「スペクテイター」に次のような内容の匿名の一文が掲載されました。「50年前の今週、チャールズ・チャップリンとアドルフ・ヒトラーが わずか4日の違いでこの世に生を受けたとき、神はひどく皮肉な気分だったようである... 二人は、それぞれ自分なりのやり方で、社会の底辺で押しつぶされてもがいている大勢の人びとの考えや気持ち、望みを代弁してきた。誕生日が相前後していることといい、そっくり同じ小さな口ひげをたくわえていることといい(ミスター・チャップリンのほうはつけひげであるが)、二人は生まれながらにして、その天才の共通の原点を表出する運命にあったのかもしれない... そして、どちらも同じ現実 - - 現代社会における「小男」の苦境 - - を反映しているが、どちらの鏡もゆがんでいる。一方は善のほうに、そしてもう一方は、この上なく邪悪なほうに...」(デイヴィッド・ロビンソン著「チャップリン」宮本高晴・高田恵子訳、(株)文芸春秋、1993)



この映画の中でチャップリンは、トメニア国の独裁者ヒンケルと、彼に迫害されるユダヤ人の床屋の二役を演じており、ヒンケルを演じるときは、ギャグと皮肉で徹底的に笑いものになっています。ヒンケルが地球儀の風船をもてあそぶ場面などを思い出される方も多いと思います。一方ユダヤ人の床屋は良識を持った気骨のある市民で、ユダヤ人排斥に抵抗して親衛隊につかまっているところを、戦場で命を救った将校のシュルツに命の恩人として助けられます。しかし、その後シュルツはユダヤ人絶滅の命令に反対したため床屋と一緒に捕らえられ、強制収容所に送られてしまいました。二人は運よく収容所を脱走、広野の中の道を歩いていくと、オスタリッチに侵攻するために終結しているトメニア軍の中にまぎれ込んでしまいます。床屋はヒンケル総統とまちがえられ、シュルツと共にオープン・カーに乗せられて、オスタリッチの首都のスタジアムに連れてこられました。ここでは「征服者を歓迎」の集会が開かれ、床屋は総統として演説を請われ、「私は皇帝になどなりたくない」と前置きしてファシズム反対の演説を始めるのです。

この演説は民主主義の理念を表したものとして、リンカーンの「ゲティスバーグ演説」にも匹敵すると賞賛した人もある(ハリウッドのアーチャー・メイヨー監督)ほど高く評価されました。次にその内容をもう少しご紹介します。

「兵士のみなさん、隷属のために戦ってはなりません。自由のために戦うのです... 独裁者というのは、自分だけを自由にして、人民を奴隷にするのです。いまこそ世界を解放するために戦いましょう - - 国と国とのあいだの障壁を壊し - - 貪欲や憎悪や狭量を追放するために。理性の世界を作るために戦いましょう - - 科学と進歩が私たちみんなを幸福に導いてくれるような世界を創り出すために。さあ、民主主義の旗のもとで、みんな一つになりましょう！」

この映画が作られた1940年(昭和15年)は、ナチズム政権の最盛期でした。撮影中もチャップリンのところには脅迫状が舞い込み、文字通り命がけの制作だったということです。これは反ナチ映画の偉大な金字塔といわれる作品で、文芸春秋編「(大アンケートによる)洋画ベスト150」(文春文庫ビジュアル版、1988年)の中でも24位を占めています。